

佳作

テーマ：多様性を認め合う社会をめざして
「言葉は届く〜吃音の彼に学んだこと〜」

岐阜県立岐阜北高等学校1年 奥村英里

言葉。それは人間にだけ与えられた特別なツールで、大切な意思疎通手段。言葉の力は偉大だ。人を傷つけ絶望の淵に突き落とすのが言葉なら、人を闇から救い出し光で照らすのもまた、言葉だと思っ

しかし、そんな大切な言葉をうまく紡げない人が、世界にはいる。言葉を紡げない原因はさまざまだが、ここで取り上げたいのは「吃音症」という病気だ。吃音とは、話す時に第一声が詰まったり音を引き伸ばしたりして、流暢に話すのが難しい状態を指す。おそらく、吃音をもっていない人が吃音症の人と会話すると、テンポが遅いと感

じらるだろう。実は、わたしの長年の友人に吃音をもっている人がいる。彼は活発でやんちゃな普通の男子だ。ただ、言葉が出にくい時があるという、それだけのこと。小学校のころからずっと一緒にいるため、わたしも学校のみんなも当たり前と彼と会話していた。休み時間の会話で彼が詰まってしまうてもなにも気にしないで待っていたし、授業の発表に時間がかかっても当たり前前に最後まで聞いていた。彼の病気についてとやかく思ったことは一度もなかった。わたしたちにとって、それが当然であり普通だった。

しかし、中学校に入学して、今まで全く見えなかった壁が、突如現れた。感じた衝撃は今でも鮮明に覚えている。自己紹介の時、彼は言葉が出てこなかった。きつとすごく緊張していたんだろう。わたしはその緊張を察して「頑張れ!」というアイサインを送ろうとした。その時、隣の席に座っていた違う小学校の女の子が、耳元でこうささやいた。

「何あの子、しゃべり方もいね」

どう反応したらよいのか分からなかった。今までそんな風に感じた

ことはなかった。なぜ、人より少し言葉が出にくいことが気持ち悪いのか、全く理解できなかった。彼女の発言が心に引っかかって、しばらく悶々と悩んでいた。そして悩んでいたのはわたしだけではなく、クラスに漂う違和感に彼も気づいていた。この空気を変えるため何かできないかと、同じ小学校の子たちとも話した。

しかし、先に前に進んだのは彼の方だった。吃音矯正のトレーニングを始めたとき聞いた時、ただ素直に、頑張る人を応援したいと思った。それはみんな同じで、わたしたちは担任の先生とも相談しながら、少しずつできることをしていった。彼の発表を、せめてわたしたちだけでも温かく聞くこと。本当にそんなことくらいしかできなかったけれど、彼の努力も実を結んで、夏休み明けには小学校のころのような空気に変わっていたように思う。

彼は秋の体育祭のリーダーにもなった。彼の持ち前の活発さで、体育祭はとても盛り上がりつつあった。体育祭のあと、クラス全員の前で彼が語った言葉が忘れられない。

「みんなが僕の声に応えてくれたことが何よりもうれしいです。言葉は届くんだなって思いました」。言葉は届く。そう、伝えたいという気持ちと受け入れる心さえあれば、吃音だろうが何だろうがそんなことは関係ない。お互いが分かり合おうとすることが何よりも大事なのだと、彼の言葉に気づかされた。

冒頭で「言葉は大切な意思疎通手段」だと書いたが、だからこそわたしたちは意思を表すためにたくさん言葉を使い、テンポの良い会話を望む。そして吃音などうまく話せない人と距離を置くとする。しかし、そこで一度立ち止まって考えてみてほしい。目の前の人々が紡ぎようとしている言葉に耳を傾けてみてほしい。わたしたちの、そんな少しの姿勢の変化が、たくさんさんの幸せな言葉を拾うことにつながっていく。伝えようとする人には、受け入れる心を。たくさんの方がお互いを分かり合おうと前のめりになれば、吃音なんてものともせずに進んでいける世界がきつと来る。

「言葉は届く」そう信じて。